

## 図書館員の四季

### SOS!

国立大阪病院 藤本 敦子

阪神大震災で被災された方々には、心よりお見舞い申し上げます。

幸いなことに当院図書室においては、被害も軽少で、書架が2連倒れただけですみました。倒れた書架を組み立て、図書を配架し終えた矢先のことです。図書室に機械化の波が押し寄せて来ました。

その1つは、入室時にIDカードを利用するという事です。24時間利用を目的に設置されたのですが、「機械が番号をうまく読み取らない」、「カードの出し入れが面倒だ」という理由から利用者もめっきり減り、今では文献依頼の時にしか利用されなくなりました。

2つめは、「図書室業務をコンピュータ化しろ!」との御上の命令でMacintoshが設置されたことです。当院図書室では、資料が少ないため相互貸借業務に主流を置き、モデムを使って相貸を始めたのですが、やはりここにも問題が生じました。依頼書を送信するまでは活気的で「さすがコンピュータだな」と感心していたのですが、最終段階の料金計算から会計への報告までにおいて、融通性のなさにてこずっているのが現状です。

また、今年中には、各医局および図書室にインターネットが導入されるとのことです。これに関してはまだ予測の段階ですが、「図書室に文献を依頼しなくていい(ひいては、相貸業務が減る)」、「図書室が静かになる」といった声がちらほら……。資料が少ない上に相貸業務までがいらなくなってしまっは、病院図書室の価値はどこにあるのでしょうか?このままでは、司書が本とコンピュータの管理人になってしまうのではないかと不安

です。

今はただ、押し寄せて来る波をどう乗り切ろうかともがいている毎日ですが、このような機械化をふまえた上で、魅力ある病院図書室を運営するにはどうすればよいのでしょうか?また、形を変えつつある病院図書室に戸惑いを感じております。

会員の皆様、よい案、事例がありましたら教えて下さい!

### 産休を終えて

公立陶生病院 岩瀬 真奈美

長い産休期間があけてみると、「そこ」は「図書室」であった。眼前に広がる何と整然とした空間!

利用者の不安をよそに、揚々と産休へ入ったのは、昨年12月のことだった。新任者は前名古屋記念病院図書室担当の伊佐治裕子氏に決まっていた。図書室業務はもとよりオンライン文献検索までしっかりお願いして、私は足の踏み場もない“そこ”(そこ=倉庫?)を後にした。産休があけ2人体制になったら整頓しましょうなどと言っていたのに……。さすがは伊佐治氏であった。

当院の図書室は、今年の4月から2人体制でのスタートをきった。業務は完全にバンク状態にあったが、心強い担当者を得て、ようやく新しい第一歩を踏み出せたと思う。現在、図書管理業務全般と相互貸借業務は伊佐治氏が、文献検索と業績管理、スライド作成などは岩瀬が担当している。相互貸借用FAX、NECのPC2台、Macintosh 4台をフル稼働して業務に当たっている。いま、ひとりで悪戦苦闘してきた5年余りを思い、理想を語り、共に働くことのできるパートナーがいてくれるこ

## 図書館員の四季

との有り難さを噛みしめている。

当院の図書室は、利用者にとって「あそこに行けば何とかなるかもしれない」という期待の持てる部署でありたいと願っている。依頼を「受けるか否か」ではなく、「いかに処理するか」を検討したいと思っている。

何度もパンク状態に陥りながら、何とか利用者の要望に応えたく、「これも産みの苦しみ」と思いつつ業務の枠を限らずに来た。今後は「育ての苦しみ」を味わうことになると思うが、利用者の向こう側に常に「患者さん」の姿を見つつ、日々努めていこうと思う。

それにしても、1月末に経験した本当の「産みの苦しみ」は、想像以上に苦しかった。これからこの言葉を使う時は、力の込め方が違うと思う。

### 私の趣味

名古屋第二赤十字病院 宮岡 千代子

私の趣味の一つに相撲観戦があります。長い間ファンだった力士は、引退して、親方として活躍しています。引退後は、親方になる人、廃業してチャンコ鍋屋に転身する人とさまざまです。

親方となって、弟子を育てていくことは、非常に難しいことです。親方になるのも、相撲の世界は国技という伝統の重みから、上下関係も厳しく、努力と忍耐が必要です。それに加えて相撲のうまさだけでなく、人を育成していく総括力のある器と運が要求されます。その厳しい条件を、すべてクリアするのは、並大抵の事ではありません。それだけに魅力があり、相撲界に残りたいと思っても、残れない現実があります。

先日、あるテレビ番組で、栃錦後の故春日

野理事長の特集を見ると、トントン拍子に出世し横綱になった人ではなく、貧困の幼少時代を経て、幾度の荒波を越え苦境にも負けず、努力と稽古で体得した横綱です。決して恵まれた体型ではなく、その小さな体をカバーするために、技能で相撲ファンを引き付けた人です。その後も小兵力士の活躍が相撲ファンを楽しませてくれます。

相撲も視点を変えて観てみると、その人の歴史、考え方が相撲に表れているように思います。ただ白黒の勝負だけでなく、行司が軍配を引いて「ハッケ、ヨイ」の掛け声から、勝負が決まるまでの間、力士の全力を傾けて闘う気合い、意気込みがヒシヒシと伝わってきて、見る人に感動を与えてくれます。それはまさしく凝縮された短編ドラマのようです。私は、これからも相撲の一ファンとして色々なドラマを見ていきたいと思えます。胸がキューとなるハラハラ、ドキドキ感、これが心地良い快感と感動に変わります。

皆さんも、一度、この快感と感動を味わってみてはいかがでしょうか？

### 花のエキス

近森病院 小川 隆子

図書室が開設されて今年7月で11年が過ぎました。最初のころ入室する人たちの中に、窓を開け放していても「独得の匂いがする」と言われ、芳香剤を置くと今度は匂いがきつすぎるといい、他の図書室ではどのようにしているのかと思案していました。花は見て美しいだけでなく、エキスのような物を発散して人体の血をきれいにしたり、細胞を活発にする素晴らしい働きを持っているとテレビで話していたのを思い出し、四季の切り花を置く